

【書評】

Hans von Herwarth,

Zwischen Hitler und Stalin, Erlebte Zeitgeschichte 1931-1945

松川克彦

本書の著者ヘルヴァルトは、一九三一年から第二次大戦の勃発する一九三九年までの八年間、主としてソヴェト・ロシア駐在のドイツ大使館に勤務。ディルクセン (Dirksen, H. von) 、ナドルニ (Nadolny, R.) 、シュレーンブルグ (Schlenburg, F. von) という歴代の大使の下で書記官を

勤め、次第に緊張を増していくヨーロッパの外交的中心となったモスクワにあって、劇的な展開をとげる独ソ関係の推移を身をもって体験した。しかし、開戦前の八月末には外務省をはなれて軍籍にはいり、一九四一年六月、独ソ戦開始後はケストリンク (Kösting, E.) 將軍の副官として東部戦線に従軍したという経歴の持ち主である。

第一章では生い立ち。第二章、外務省勤務。第三章モス

クワ派遣等々、第二十三章終戦に至るまでの回想が記されている。一定のテーマに関する書物ではないので、以下では一九三九年春以後夏までの独ソ不可侵条約交渉について紹介したい。

一九三八年は「ヒトラーの年」と呼ばれている。この年ヒトラーは戦かわずして、オーストリアおよびズデーテンを手に入れ、国内におけるその威信はゆるぎないものとなった。さらに翌一九三九年になると、チェコスロヴァキアの完全な支配、メーメル占領、ルーマニア、ポーランドへとその目標を拡大していくのである。

こうした中で著者ヘルヴァルトの努力は、外務省の内部にあってヒトラーの外交路線にどのように「抵抗」するか

に向けられた。ナチスのイデオロギーには最初から反対であったこと、著者自身が、ナチスのいう『非アーリアン』であったことなどが、「抵抗」を決意させた直接の原因であるという。その他にも、モスクワのドイツ大使館がナチスには批判的であり、ナチスの支配する Wilhelmstraße にたいして一種の自立的立場を保っていたこと、また、伝統的な親ロシア論者である大使シューレンブルク自身も、戦争を前提とした独ソ接近をすすめる外務大臣リッペントップ (Ribbentrop, J. von) の政策に懐疑的であったといわれるが、このような雰囲気も「抵抗」を可能にさせたことであろう。

独ソの接近に関していえば、すでにミュンヘン会談直後からスターリンは、東方へ鋒先を向けてきたドイツとの衝突を回避するため、ヒトラーとの了解を求めると決意をしたとみられているが、不可侵条約交渉が本格的に軌道にのりはじめるまでには、相互の意図を確認するために何段階もの公式、非公式の打診がなされた。例えば一九三八年十二月、新聞における攻撃を相互にさし控えることを約束した独ソ紳士協定。一九三九年三月、ロシア共産党第十八回大会

におけるスターリン演説。同年五月のモロトフ (Morozov, B.) 外務人民委員就任等々。スターリンとヒトラーとの間で行なわれてきた肚の探りあいを経て、いよいよ直接に不可侵条約をテーマに折衝が開始されるのは、一九三九年五月二十日、モロトフとシューレンブルクの会談においてのことであった。

著者は、慎重にすすめられていた両国接近のきざしを、独自の判断から五月始めには察知している。独ソ接近がポーランドの犠牲においてなされることになることとみた著者は、これを妨げようとする。その方法は、独ソ接近の可能性を、(一)イタリア側に、(二)西側諸国に、伝達することであった。イタリアに知らせることによってムッソリーニの介入を導き、チェコ分割を実現したミュンヘン会談の方式によってポーランドの一部をドイツに割譲するというものである。他方西側諸国に伝達することに関しては、著者はくわしくその意図を説明していない。しかしながら当時の西側諸国政府の状況から判断して、ドイツと明確に対決することが期待できないとすれば、著者が望んでいたのはチェンバレンがもう一度ヒトラーと会見することだったのでは

ないかと思われる。(一)も(二)も、ポーランド領の一部をドイツに与えることによって全体を救おうとするのが著者の目的であり、相違点は、誰がヒトラーにたいしてポーランド領分割を提案するのかということになる。

この計画に従って著者は五月六日に、イタリア大使館員レッリ(Relli, G.)と会いニュースを伝えたのを皮切りに、その後頻繁に会談して半信半疑のレッリを説得する。また著者は、アメリカ、イギリス大使館員とも会談して情報をもたらしているが、このことはアメリカ側の資料からも確認できる⁽¹⁾。

しかしながら、この試みは成功しなかった。独ソ接近という事態の深刻さについて充分に考慮することのなかった西側諸国は勿論、期待したムッソリーニも報告をうけて確かに驚いたものの、特別に介入する必要性を認めなかった、と著者は述べている。

当時ロンドンもパリも、独ソ間の調停役としてムッソリーニ、又はヴァチカンに期待するところが大きかったのであるが、ここに独ソ紛争とイタリアの役割について興味ある一端をうかがうことができる。著者ヘルヴァルトから情

報を提供されたイタリア大使館員レッリは、これを大使ロッシ(Rossi, A.)に伝え、ロッシは更にこれを六月十二日付で外務大臣チアーノに報告している⁽²⁾。問題は、チアーノからムッソリーニに伝達されたかどうかという点である。ヘルヴァルトは、ムッソリーニは知っていながら介入しなかったと述べているが、ムッソリーニの長男の回想録によれば、ムッソリーニは、独ソ不可侵条約が公表された八月二十四日になって始めてそのことを知り、驚ろいたという。ムッソリーニはそこで改めて外相チアーノにたいして事前の情報の有無に問いたたいたところ、チアーノはそれを否定し、情報のなかったことを強調した。ただし、ベルリン大使アットリコ(Attolico, B.)からはそれに近い報告があったものの、極めて不正確であったので、ムッソリーニに伝えるには値しないと判断したとつけ加えた⁽³⁾。

チアーノは個人的な対立関係にあったアットリコに責任を転嫁しているが、ロッシが疑問の余地のない程明確な報告を送っていることは間違いないので、この間の事情は、チアーノがロッシ報告を読まなかったか、または読んでもこれを故意にムッソリーニに伝えなかったか、のいずれか

であろう。ここで参考になるのは、デュフェリチエの『ムツソリーニ伝』である。それによるとチアーノは、情報をムツソリーニに与えず自分自身で処理することが多かったとあるが、⁽⁴⁾ ロッソ報告もその一つだったのかも知れない。

もう一点述べるならば、私は抵抗という文字をカッコに入れて使用した。その理由は、著者ヘルヴァルトの善意の動機とは別に、これが真の意味での抵抗となり得たかどうか疑わしいと思うからである。特にミュンヘン方式でポーランド問題を解決しようとする試みに関しては、例え期待どおりにムツソリーニまたはチェンバレンが調停に乗り出したとしても、ポーランドがそれをうけいれる可能性はほとんどなかったといえよう。

著者ヘルヴァルトは、チェコ人とポーランド人の気質の相違を知るべきだった。ミュンヘン会談で分割されたチェコスロヴァキアは、戦間期を通じて強国、特にフランスに従順な国であったが、これと異なりポーランドは、事が領土および住民に関するものである限り、列強の圧力には屈伏しなかっただろうと思われる。ちょうど十九年前、一九二十年の夏、ソヴェト赤軍にワルシャワの東の郊外まで攻

めこまれた時、ポーランド領の一部割譲などを条件にしてソヴェト・ロシアとの間の和解を申し出たイギリスにたいして、当時のポーランド外相サピエハ (Sapieha, A.) は、例え西側諸国の支持を失なったとしても領土の割譲には応じられない、とこれを拒否したことがあった。

サピエハは婉曲に述べたのだが、大国の圧力の前に屈するくらいなら国を失なう方を選ぶという強い決意を表明したのであった。ここで問題とした一九三九年にもポーランドの外務大臣ベック (Beck, J.) は、ダンツイヒおよび回廊にたいするドイツの領土要求にたいして拒否回答を行なうたうえ次のように演説している。すなわち、日常生活の上で最も尊重されるべきもの、それは名誉であり、名誉こそ国家や民族に超越して存在するものである、と。

割譲が一部だけに止まらないことは、チェコスロヴァキアの例をみるまでもない。ヒトラーの目的は、ダンツイヒや回廊だけに限定されるものでないことは明白であった。ベックの演説はこの点で、ポーランド人の一般的な感情を代弁したものであったといえるだろう。ただしベックはサピエハとちがって、本当に国を失なってしまった。この間

題はまた別に論じるべきものであるが、確実なことは、ミュンヘン方式ではポーランドは救えなかったし、ポーランドもそれを受諾することはなかったであろうといふことである。

ヒトラーにたいする著者ヘルザフルトの抵抗の姿勢そのものは、確かに評価されるべきである。また当時の国際的な趨勢も考慮されなければならぬであろう。しかしながら、ポーランドに譲歩を強いることを前提としている限り、その立場は伝統的なプロイセン政治家の *Ostpolitik* の枠から一步も出るものではない。隣国同志であっても、その国民性にまで立ち入って理解することがいかに困難かということを考えさせられる著作である。

(Frankfurt am Main : Propyläen, 1982, 356+4+8 p.p.)

【註】

- (1) Confidential U. S. Diplomatic Post Records, Soviet Union : 1934-1941, Part 3, Reel no. 29, document no. 00368-00369.
- (2) Collana di testi diplomatici, *Angusto Rasso*, Roma, 1979, p. 95-97.
- (3) Vittorio Mussolini, *Mussolini, e gli uomini nel suo tempo*, Roma, 1977, p. 23-24.
- (4) Renzo De Felice, *Mussolini il Duce, Il Lo stato totalitario 1936-1940*, p. 632.

(京都産業大学助教授、奈良大学非常勤講師)